

疑問 56

「教頭は板挟みになって大変」 は本当か

私の経験上、教頭が板挟みになりがちというのは事実です。よくあるのは、校長と教職員との板挟みです。その関係調整に苦勞する教頭も多いかもしれません。

例えば、I先生から自分（教頭）に「校長の言っていることには納得できない」と相談があれば、関係調整のために動かなければなりません。角が立たないように言いまわして校長に伝えるのですが、校長から「I先生の考えは受け入れられない。教頭から説得してくれ」と言われてしまうこともあります。そうすると、I先生に校長の意向を伝え、再び話し合いをすることになります。そして、I先生の異論をまた校長に伝えて…、という堂々巡りの板挟みです。そのうちに**双方とも苛立ちや腑に落ちない気持ちのやり場がなくなり、その矛先が教頭に向くという最悪の事態も起こり得ます。**

この板挟みをどう捉えたらよいのでしょうか。まずは、このような（誰かが板挟みになるような）状況になること自体が、組織として健全ではないという認識をもっておく必要があります。その場合、校長から批判されるかもしれませんが、校長に対して「難しい状況です。校長から直接I先生に話をしてもらったほうが、話がこじれないと思います」と伝えることも、選択肢の1つとなります。

板挟みの状況に悩まないためには、管理職に必要な資質や能力としてたびたび挙げてきた「人間関係調整能力」や「対話の力」が肝となります。それらの力があるかどうかで、板挟みの状況を大変と思う度合いが変わってきます。これまで人と人との橋渡しの役割を担ってきた人であれば、それほど苦勞を感じないかもしれません。

疑問 57

「現場第一」「授業が命」 という思いが捨てられない

私自身、「教師は授業が命」という現場第一の感覚で長年やってきましたので、管理職になったら「授業をやりたい」という思いが一層増してしまうのではないかと考えていました。しかし、今のところ、それは杞憂だったようです。

子どもたちに授業をする機会はもちろん大きく減りましたが、むしろ管理職になったことで、子どもたちの幸せのためにできることの幅が広がったと思うようになったからです。

ですので、私のように現場第一の感覚でやってきた教師が管理職の道に進むことにも意味があると思います。子どもたち（あるいは学校）とのかかわりに、授業と同じくらいのやりがいを見いだしたり、それに代わる歓びとも言えるような成長を感じたりすることもあるからです。

結局のところ、**自身の人生観に基づき「何に、どれだけの時間を、自分の人生に使っていきたいのか」ということに尽きるのではない**でしょうか。何のために授業に力を注いできたのか、何のために教職員をしているのかという根本的な部分をしっかり見つめ直していただくことです。

子どもの成長や幸せという目的に向け、「授業をとおして実現していきたい」「現場でこそ自分の強みが活かせる」という思いがあるのなら、現場の第一線を歩み続けることも後悔のない選択に違いありません。言うまでもなく、**教育現場は、子どもたちとともに過ごす先生方がいてこそそのもの。学校には素敵な先生が多く、そのような先生に子どもたちも救われているのだ**と思います。